

## はじめに

筆者が反転授業と出会ったのは、第11回 e-Learning 教育学会の研究大会（2013年3月16日に大阪大学で開催）で加藤大氏（当時（株）ファカルタス事業戦略室長、現（株）ハンテンシャ代表取締役）とお会いしてからとなる。そのときのプログラムは、

14:20-14:50 加藤 大：学習意欲に応じた e ラーニングデザインの実践

15:05-15:35 河村一樹：アクティブラーニングとしての Q&A システム — 講義科目「e-Learning 概論」での適用—

であった。その後、名刺交換を行い、後日、筆者の研究室でお会いすることとなった。

ちょうどその頃、筆者の研究室では、e ラーニングに関するいくつかの研究を進めていた。このため、ファカルタス社の e ラーニングシステムである SeLPS をクラウドサービスとして利用させて頂くことになった。

それとともに、加藤氏から反転授業について、いろいろと話を聞く機会を得た。その結果、反転授業を実践すべく、研究室において、アカデミックスキル教育に関するデジタル教材の開発を始めた。

2014 年度には、SeLPS を用いての反転授業を、加藤氏に支援してもらいながら、科目「演習（1）」において初めて実施した。それに合わせて、デジタル教材のブラッシュアップも並行して進めた。2015 年度には、e ラーニングシステムを SeLPS（運用終了のため）からキャストリア社の goocus pro に移行した上で、新しいデジタル教材をもとに、同じ科目で、反転授業を実施した。その教育実践について、本書で紹介している。

また、2015 年度の科研費において、共著である今井康博先生との共同研究で申請したテーマが採択された。これについても、加藤氏のご協力があったからこそ実現できたといえる。

その共同研究のテーマは、「反転授業評価モデルの開発」としている。そこで、この研究に絡んで、筆者はアカデミックスキル教育における反転授業を、今井先

生は内容言語統一学習における反転授業を、それぞれ取り上げて記述することとした。いずれも、教育実践を踏まえた上での論述を展開している。

最近、大学教育だけでなく、学校教育においてもアクティブラーニングが提唱されている。それでは、反転授業とアクティブラーニングの関係はどうか？加藤氏の捉え方も、「反転授業は、講義とアクティブラーニングの中間に位置するハイブリッドな教育制度？」から「反転授業は、アクティブラーニングに進化する以前の教育制度？」へ、そして、「反転授業は、アクティブラーニングを定型化した教育制度である」と移ってきている。

いずれにせよ、反転授業という新しい授業スタイルが、今後、どのような形で体系化（学術的理論から応用技術に至るまで）されるかについて見守りながら、教育実践を続けていきたい。

最後に、反転授業の教育実践に関して、いろいろとお世話になった加藤氏に、心から感謝の意を表します。

平成 29 年 3 月

著者を代表して 河村一樹

大学における反転授業

---

目 次

はじめに	i
<b>第 1 章 反転授業概論</b>	<b>1</b>
1.1 反転授業とは	2
1.1.1 反転授業の起源	2
1.1.2 反転授業の定義	4
1.1.3 反転授業の種類	6
1.1.4 反転授業の効果と課題	7
1.2 反転授業と e ラーニング	9
1.2.1 反転授業の環境	9
1.2.2 e ラーニングとは	12
1.2.3 e ラーニングを用いた反転授業	15
<b>第 2 章 アカデミックスキル教育における事例</b>	<b>17</b>
2.1 反転授業の実践に向けて	18
2.1.1 大学の初年次教育	18
2.1.2 初年次教育におけるアカデミックスキル	23
2.1.3 ルーブリックによるスキル評価	25
2.2 反転授業の実践事例 — 東京国際大学の場合 —	51
2.2.1 プラットホーム環境	52
2.2.2 科目「演習 (1)」実施に向けての準備	66
2.2.3 科目「演習 (1)」での実践例	85
<b>第 3 章 CLIL、社会・感情学習、そして反転授業</b>	<b>127</b>
3.1 CLIL (内容言語統一学習) とは	128
3.2 「德育」とは	132
3.3 社会・感情学習	133
3.4 授業の実践例 — 上智大学の場合 —	136
3.4.1 主要な学習活動	136
3.4.2 学期プロジェクトと反転授業	138

3.4.3 反転授業に対する学生達の反応	141
3.5 検証	149
3.6 今後の現実的課題	153
参考文献	157
謝 辞	160